山添町長と
みんな・みえる・みらいトーク
Vol.01

スポーツ×未来の教育

トークゲスト／与謝野町名誉町民　木﨑 良子さん

町長が町民の方などと直接お話しし、伺った意見を町政に反映させることを目的として開催する「山添町長とみんな・みえる・みらいトーク」。毎回テーマを設定し、３つの「み」をトークテーマに現場の声を町政にいかしていきます。第１弾は、ロンドンオリンピック女子マラソン日本代表で与謝野町名誉町民の木﨑良子さんをトークゲストに迎え、「スポーツ×未来の教育」をテーマに対談した様子をお届けします。

オリンピックをめざしたのは社会人から。まずは目の前の目標を大切にしていくことが大事。

――スポーツをする人たちにとってオリンピックは特別な場所だと思います。木﨑さんがオリンピック出場を通じて得られたものを教えてください。

オリンピック出場を目標にしていたのは自分自身でしたが、「それをサポートや応援してくれた方がたくさんいる」ということに気づきました。自分がやりたいことに対して、一生懸命サポートや応援してくれる方のありがたさは当たり前のことではなく、「周りに感謝する」という気持ちが、オリンピックに出場してから改めて感じるようになりました。

パブリックビューイングの様子（2012年8月5日）

――18歳まで与謝野町で過ごされ陸上選手として成長していく中で、幼少期の経験はどのような影響がありましたか。

実際に陸上部に入ったのは高校からでした。小学校のときは姉が少女バレーに入っていたので、4年生から6年生までバレーボールを、また、中学校ではバスケットボール部でした。体を動かすことが好きで、いろいろなスポーツをしたかったということもありましたが、一時期、勝つことが当たり前と思っていた中で負けることを知りました。負けるのが嫌で少し陸上から離れようと思い、違うスポーツをしていました。しかし、どのスポーツをするにしても走ることは基本なので、続けてきてよかったと思っています。

――高校のときに、「すでに将来こんなかたちで活躍するんだ」というような明確な目標があったのでしょうか。

「オリンピックに出たい」と思ったのは高校時代ではなく、社会人になり自分にそういう可能性があるのかなと意識してからです。高校のときは目の前の小さな大会から「まずはこの大会で一番をめざそう」「インターハイ（全国高等学校総合体育大会）に出場」とか、大学時代には「インカレ（全日本学生選手権大会）でトップを取ろう」など、目の前の目標を大事にしていました。

――野田川地域はスポーツが盛んな地域です。木﨑さんにとって地域との関係、地域から学んだことなどはありますか。

知らない外部の方よりも、いつもコミュニケーションをとっている方から指導を受ける方が、常に自分の思いや考えを素直に言い合えると思います。それは指導者もですが、指導を受ける側も同じだと思いますし、その方が伸びていくのではないかと感じています。

――公立中学校において、これまで教員が受け持っていた部活動を地域に移行していく動きがありますが、どうお考えでしょうか。

その動きを知ったのが、一線を退いて講習会を受けたときでした。良い点は、先生方の負担軽減や合同になると子どもたちのやりたい部活動が増えるという点です。反対に課題として見えてくるのは、地方と都市部での外部指導者の方が来られたとしても試合にはついていけないなどの問題もあるので、いかに「部活動指導員」を増やしていくのかが課題だと思っています。

オリンピックの走りを見て、逆に町民の皆さんが勇気や元気をもらったと思います。（町長）

与謝野町名誉町民
木﨑 良子　Kizaki Ryoko

下山田出身。江陽中学校卒業。
中学校はバスケットボール部に所属しながら全国中学校体育大会 1500 mに出場し、宮津高校（現宮津天橋高校宮津学舎）で本格的に陸上を始めインターハイ 800 mに出場。2011 年の横浜国際マラソンで優勝し、2012 年ロンドンオリンピック女子マラソン日本代表に選出されるなど、国内外で活躍。今は第一線を退き、陸上教室や講演などの社会貢献活動を通してスポーツの楽しさを伝えている。